

# 米山梅吉記念館 館報

2014  
(平成26年)

秋

Vol. 24



勇猛精進、以て自己の天地を開拓して将来の運命をトすべし。所謂「腕まくり」となりて身を挺するの決心あらば、成功は手に垂して而して待つべきなり。賦性才能自ら大小長短あり。適材適所各々向かふ所なるべからず。今日の産業組織は假令大資本主義に依ると雖も、亦た小規模より発して他日の大を期するを得べし。語を換へて云へば、人の悉く大傘下に集まるが故に却て他に閑却放置せられたる事業は多多あり。若夫れ之を見出すことの容易ならずとせば、冒険遠征の途に上つて身を乾坤に附するも可ならずや。斯くありて始めて人間社会の事多種多様の妙趣を呈すべし。

グラッドストーン嘗てグラスゴウの大学の諸生に演説せる中に曰く「卿等は一人も残らず此社会に地位と職分とを有するものなるを信ぜよ、只夫れ之を発見するは卿等自身の事なり」と。諸君希くは徒に時流に棹して反て転覆の危険に陥ることなく、若し水に走るもの多ければ宜しく去て山に攀ち、將た野を横ぎるも亦可ならずや。社会は有ゆる方面に人物を要求し、因て以て人世の改善を待つ。願くは光明に向ても暗黒に向ても慎重の用意を怠らざらんことを。人間棺を蓋ふて然る事定まる。徒に目前の幻影を逐ひ富貴の病患是れ学ぶべきにあらずや。

人中龍あり、獅子あり、騏驎なからずや。

米山梅吉著「学校卒業生に告ぐ」より



公益財団法人 米山梅吉記念館



# 創立45周年を迎えて

理事長 渡邊 脩助

「梅雨明け10日」という言葉がありますが、連日の猛暑に熱中症が多発しているようです。水分補給を怠ることのないようにお願いします。

全国のロータリアンの皆様、米山梅吉記念館も昭和44年（1969）年の開館以来、45周年を迎えることができました。これも偏にこれまでご支援くださいましたロータリアンのお陰と感謝申し上げます。

記念館は日本のロータリーの創始者 米山梅吉翁の遺徳を偲び、その偉業を讃え、ロータリー精神の普及を図る為、昭和44年3月26日財団法人米山梅吉記念館として発足しました。米山家本邸跡地に米山家ゆかりの方々、静岡県東部の近隣11ロータリークラブの協力、国際ロータリー第2620地区（静岡・山梨）はじめ神奈川県の第2590,2780地区、東京ロータリークラブ、ロータリー米山記念奨学会等のご寄付によって建設され、法隆寺の夢殿に似た外観の旧館が同年9月16日に開館されました。その後、館の狭隘と老朽化、そして来館者の増加に伴い新館建設の機運が高まりました。平成8年、翁没後50年忌を記念し、新館建設を全国のロータリークラブに呼びかけました。幸いにも多くの賛同を得て、多くの献金が寄せられ、平成10（1998）年4月28日に新館が完成しました。

45年の歴史がありますが、未だに記念館が米山記念奨学会付属の施設と認識されているロータリアンが非常に多いように見受けられます。

日本のロータリーには米山名を冠した二つの組織があります。それは、ロータリー米山記念奨学会と米山梅吉記念館です。全く別々の独立した公益財団法人です。奨学会は、日本の全ロータリーが関わる巨大な財団ですが、当記念館は静岡県知事認可で設立されております小財団です。お互い財源も規模も運営も全く異なる組織です。財源は全てロータリアンからの浄財で賄っております。その運営は厳しく、記念事業についてもその財源確保に苦戦しているのが現状です。この状態を見かねて当2620地区 岡本ガバナーは、全国地区ガバナーにOne Coin寄付を呼びかけて戴きました。その結果を楽しみに期待しております。

平成26年6月11日岩手県紫波町彦部地区で「三井

報恩会事業記念碑除幕式及び祝賀会」が開催されました。私が出席すべきでしたが所要があり、井口常務理事と木内事務局長に出席して頂きました。

昭和8（1933）年の三陸大津波、昭和9年の大冷害と度重なる災害等で苦しんでいた岩手県彦部村と青森県西平内村が三井報恩会の「特定振興村」に指定され破綻に瀕していた村が救われました。その実働部隊の長が報恩会理事長の米山梅吉でありました。

当時「三井報恩会特定振興村、岩手県指定経済更生村、中央教化団体指定村」と書かれた丈の高い木製の標柱は、彦部村の人たちの誇りでありました。その標柱も80年の歳月で朽ち果ててしまい、この事業への感謝とその功績を後々まで顕彰するために、この度の記念碑建立が行われました。その発起人が「三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会」の会長 長澤聖浩氏であります。氏には9月に行われる秋季例祭・45周年記念講演講師をお願いしております。

米山翁の肖像画（原画）が元三井信託銀行副社長谷内宏文氏のご尽力により、45周年記念式典で三井住友信託銀行より当館に寄贈されることになりました。この肖像画は往時の三井信託株式会社では、長年「社宝」、つまり会社のお宝のように取り扱われていたそうです。これからはご来館者が身近で見ることができ幸せを感じて頂けるものと思います。

来る9月13日の秋季例祭・創立45周年式典では、記念講演及び寄付者・功労者への感謝状贈呈のほか特別な記念事業は行いません。創立50周年を充実した記念事業にするためであり、実行委員会を設置し検討に入ったところです。

当記念館は、前述のようにご訪館者のスマイルをはじめとして、100円募金、賛助会員等全国のロータリアンからの浄財によって運営していることをご認識いただき、更なるご支援ご協力をお願いいたします。

日本のロータリー関係では唯一のロータリアンによるロータリアンのための施設です。日本のウォリングフォードと言うべき聖地です。「米山詣」をして頂けるような記念館になるべく今後も務めてまいります。皆様のご来館をお待ちしております。

# 春季例祭



移動例会をもって例祭に参加



例祭式典

- 日時 2014年4月26日(土)
- 会場 (公財)米山梅吉記念館ホール
- 例祭及び墓参
- 例祭 式典
- 記念講演  
演題 「東京五輪が国際交流に果たす役割」  
講師 水野正人氏  
第2580地区 2011~12年度ガバナー（東京RC）  
東京オリンピック招致委員会CEO  
日本オリンピック委員会 名誉委員
- アトラクション  
ザ・ウェストサイズ(三島西RCバンド)
- 懇親会



アトラクション



講師を囲んで懇親会



墓参

## 記念講演

### 「東京五輪が国際交流に果たす役割」

水野正人



こんにちは、水野です。ポール・ハリスが1905年にロータリーを立ち上げなかったら、1920年に米山梅吉が日本にロータリーを作ろうとおっしゃっていなかったら私達はここにいません。同じように1894年に

クーベルタン男爵が、古代オリンピックを近代にできないか、とパリで国際オリンピック委員会を立ち上げなかったらオリンピックはなかったということですから、今私達がやっていることをスタートさせ

た先達たちを心から感謝して、ますます発展させていこうと集まって、志をもう一度確かめることが大事だと思います。

今日私がここへ来たのは、御礼であります。日本中の皆さん方のご支援を頂いて招致が成功したのです。2013年9月7日アルゼンチンブエノスアイレスで行われたIOC総会の初日、午前10時30分（現地時間）、私達がのべ8年間やってきた招致の集大成で壇上に上がりました。最初のスピーカーは高円宮久子妃殿下。英語と仏語でお話をされ、議場はさっと爽やかな清らかな風が吹きました。次は佐藤真海ちゃん、彼女はパラリンピアです。足の不自由さと東日

本大震災被災という、大変な困難をスポーツの力で乗り越えてきたというお話をされました。次にJOCの竹田恒一会長。彼が東京でオリンピックをする理念、私達はディスカバートゥモロー、明日をつかめ、ということの基本のテーマにして、しっかりやりますと。その後、テクニカル担当が運営方法や、アジアでやる大切さについて申し上げました。私も周囲の反対を押し切って仏語でもやらせてもらいました。私の後は猪瀬都知事。少なくとも彼が知事になってからの招致にける情熱は大変なものでした。その後お・も・て・な・しの滝川クリステルが仏語で東京の魅力について。その次はフェンシングの太田雄気選手が元気一杯選手村のすばらしさ、国際交流ができるオリンピックの力はすごい、と。最後に安倍総理です。総理のテキストには福島原発汚染水漏れの問題は全然入っていませんでした。あれが8月下旬に出てきてから形成一変して、ネガティブキャンペーンがおこった。総理の口から、福島の汚染水に対する責任は政府にある。政府が責任をもってこれを解決する、と言っていました。これで議場がぱあっと安心した空気に包まれてよかった。最後に竹田会長がもう一度「VOTE TO TOKYO東京に投票してください」と話し、45分のスピーチが終わりました。イスタンブールも東京もマドリッドもそつなくプレゼンをやりました。最後の投票が行われるやいなや会議は終了です。ロゲ会長も結果を知らない。5時にみんなが集まり、選挙管理委員長が封筒をもって渡します。会長は封筒を開けてぱっと見て「2020 CITY OF TOKYO」ほんとホットしました。1960年から半世紀。日本でもう一度感動を皆さんと共有したい、と2016年の招致を行いました。2016年はJOCの副会長として招致をやり、コペンハーゲンで負けました。帰国後ただちにJOCでは招致戦略



2020年東京五輪決定の調印式の様子『オリンピックまるわかり事典』より

本部を作り、私が本部長になって2020年の準備をスタートさせました。2011年立候補する年になり、3月11日、えらいことがおこりました。私もテレビを見ていてこんなこと本当にあっていいのかと。NYの911のテロも信じられなかったですが、この津波の様子は招致もふっとんだ、と。

IOCはいろんなプロジェクトをたててくれました。色々ディスカッションをして被災地のことを考えなければいけない。そこで竹田会長が被災3県の知事さんのところへご挨拶に行き「私達は日本全体が素晴らしい国になるということの基本として招致をやりたいのですが、このような状態になりましたがいかがでしょうか」と言ったら、3県の知事さん共に「招致をして日本にオリンピックが来ることになったら日本全体が元気になる。どうぞ招致を進めてください」と同意をいただきました。当時の石原都知事が「たいまつは火は消さない、ともし続ける」といい、私達はIOCに届け出て立候補をいたしました。2011年9月7日招致委員会をスタートし、丁度2年後に決定したわけです。私はCEOになり、7人でスタートし、最後は130名くらいになりました。前回の招致で赤字を作り、借金でスタートなんです。最終的にはプラスで終わることができました。

招致には6つの要素があります。一番は計画。二番は支持率。三番は事業広告。四番は業界委員会対応。五番はプレゼン。六番はロビーイング。

オリンピックは計画が商品です。ぴかぴか磨いてこの商品なら売れまっせというものを作らんかぎりだれも買うてくれまへん。いまある国立競技場を壊して8万人の国立競技場を作ろうということにしました。メインスタジアムをCGで見せると「ワオ」とかいう。やはり「ワオ」を言わさないとなかなかいつかない。これが計画。

次に支持率。2012年4月にIOCが調査したら47%。事業広報必死になって仕事をしました。ロータリーは全員にバッジを配りました。2013年1月の調査では7割になり、8月に92%になりました。

四番目は業界委員会対応。15人編成の評価委員会が候補地に来ます。開催するについて、国はサポートしてますか、医療をどうしますか、安全はどうですか、宿泊は交通は、という14項目を説明し質疑応答をする。その後はバスで会場視察。ミスゼロで大変高い評価をいただきました

た。

五番目はプレゼン。最後のプレゼンまでに5回公式のプレゼンをやりました。これはプロと一緒に考えストーリーを作り、聴衆は誰だからどのようにしよう、誰をスピーカーにして順番をこうしてこのようなことを言おう、全部やります。

最後がロビーイング。IOCメンバー約100人。国も違えば男女、宗教、文化全部違うので好みが違う。今回は外務省がIOCメンバーがいる在外公館に全部声をかけて色々調べて報告があがっています。CIAの長官のようです。竹田会長は王族とか王室をお願いします。ヨーロッパは王室、中東は王族です。アメリカOK南米OK、役割分担をしていきます。3週間くらい世界を廻り、ロビーイングは話を聞く。「2020どうですか」と聞くと「こうせい、ああせい」と。商売もお客さんの言うことを聞くのが大事ですから。そして星取り表の通り、今回はオールジャパン体制でうまくいきました。

今日の話は東京オリンピックパラリンピックが作る国際交流という話ですが、私達は、東京が成功万歳さよならではなくて、その後いかに良いレガシー(遺産)を残すか、それも有形無形のをいかに作りあげるかということを計画の中に入れていきます。

古代オリンピックは、紀元前776年から1200年間4年に1回一度も欠けることなくやった。調べたら、競技とあわせて詩の朗読や詩を書くと文化プログラムと一緒にやっている。2020年以降、文化をいかに作りあげるか、が大きなテーマになります。そして教育。英語教育だけでなく、躰、知識、知恵、社会教育というところまでやれる社会にしていきたい。それからボランティアリズム。これはロータリーも皆ボランティアでやっていますが、東京大会は8万人ボランティアが必要です。ロンドンも8万人。ロンドンは賢い。ボランティアのことを「ゲームメーカー」と呼ぶ。こう呼ばれたらはりきりますよ。みんなの気持ちを作り上げていってボランティアがどんなに大事かをつくりあげていく。

そして国際交流。アメリカのヘッジファンド、「石油買うで」「OKOK」投資をします。値段が上がってきます。誰が被害者や、我々ですよ。ウィンウィンシチュエーションや。売り手よし、買い手よしだけです。世間ぜんぜん悪いじゃん。こんなんでええんか。日本のロータリーは違います。職業奉仕は売り手よし、買い手よし、世間よし。この倫理観がものすごく大事。私達はもう一つ先のことを考えて

自分の主張をすべき、これが国際交流の一番大事なことはないかなと。自分の主張だけして通るなんてことはおかしい。みんなが倫理をしっかりとって売り手よし、買い手よし、世間よし、ということ让世界が知ることが大事。

もう一つ、クーベルタンは、古代オリンピックを研究してビックリしました。古代オリンピックはギリシャのオリンピアという町に集まって4年に1回やっていた。そのころ車もバイクもない。歩いてきて歩いて帰る。オリンピックをやるから争いやつたらいかん。オリンピックをはさむ前後3ヶ月、みんな戦いやめ。これにクーベルタンはうたれて近代オリンピックは国際スポーツ大会を通じて人類の繁栄と世界平和を探究する一大教育活動にした。崇高な理念をもってオリンピックを開催している。

ロータリーも世界平和に何が必要か、ということを私達は進めて行く必要がある。日本も高齢化しています。私70歳になりました。友人が「オリンピック来るようになってよかった。生きる望みができた」と言ってます。元気でなくちゃだめですよ。気のもちようや。平和センターは、先ずは健康。二番目は教育。平和が大事といますが、もっと上に行く言葉があるんですよ。教育です。人間が躰も受けない、知識も知恵もないと平和は築けません。本能だけで生きてきたら争いばかりです。私達は教育をうけて人を思いやる心があるからみんなが支え合って生き、平和をつくる。教育が一番。ロータリーの平和センターも教育を大事にしています。国を治める人が教育がなかったら自分のことばかりですよ。そして貧困と救済です。世界中をみたら三分の一の人がお腹を減らしているのです。日本は食糧自給率39%、61%輸入ですよ。その上に全部の食料の3割捨てているのです。神様に怒られるちゃうかなと。これは我々が世界に何ができるかを考える時期にはいっていると思います。

国際交流で大事なのはコミュニケーション、人と人が通じ合うことですが、コミュニケーションは相手をよく知ること。相手をよく知るとは自分を知つ



クーベルタンの肖像  
『オリンピックまるわかり事典』より

てもらふことから始まる。国際交流でも自分はこんな人間です、どうでっかとお互い知り合っ、自分をまずあげっぴろげにすることが大事といわれています。21世紀、よい世紀になってほしいと思ったとたんNYでテロが起き愕然としました。その後なかなかいい事おこらん。そしてナショナリズムという物が出てきた。自分の国さえよければいいと。世界の人が、もう少し他の国も思いやり、我慢しよう、となればもうちょっとよくなると思います。国民がエゴをいう。するとトップに立つ政治家がそれを反映せなあかんと思う。自分の国が上手いかないと、他の国を責めることで国民の目をそっちに向かせる。今、各国のリーダーがこれでほんまにええのかという気がしてなりません。我々ロータリアンとして健全な国を作って他の国を思いやる政治をやる人をお願いしなければと思います。我々も今日から心を入れかえ、気を若くもって遊ぼう、やろうぜと。

私はおぼっちゃまくんで生まれてきました。「あれほしい」というと翌日ぱっと出てくる。ですからあんまり感謝して生きたことはない、当たり前と思っていました。アメリカへ行って初めて、これどうしたらええの、あれどうしたらええのと言うと、皆本当に手伝ってくれるんです。そのたびに「サンキュー」と言う「プレジャー」と言うんです。「プレジャー～喜んでやりませ～」そのとき初めて人を助ける

今回の春季例祭に、イギリス人のレイチェル・ヘインさんが、米山むつき様と一緒に参加されました。20年ほど前、むつき様のお宅には、アメリカやドイツなど数多くの留学生が出入りしていたそうですが、オックスフォード大学の学生だったレイチェルさんもその一人でした。先に出版されていた『米山梅吉翁物語』を「日本語の勉強をかねて英語に翻訳してみませんか」というむつき様のご提案で、二人の共同作業が始まりました。日本語、特に「なめりって何？沼津中学って？」と日本人でもわかりにくい固有名詞などを、むつき様が逐一チェックされ、約半年かけて翻訳されました。「長い翻訳ができて嬉しい」とご自身があちこちでお話されているように、この仕事は、レイチェルさんにとって翻訳という仕事だけではなく、米山という日本人を知ること、さらにはそのご家族との知己を得、未だに家族ぐるみのおつきあいをされるなど、大きな宝となったようです。そのご縁で、レイチェルさんは日本に来るたび

きに喜んでやる人がいるんだと知って、それから自分がやる時も喜んでやってあげようと思った。喜んでやるのと嫌々やるの全然違います。

今の青少年は海外行かないとか、内向きや。これを外向きにしてなんでも喜んでやるというふうなロータリーは青少年育成をしっかり進めて行く必要がある。最近はきれる子どもが多い。感謝こそすれ切れちゃまずいぜと、性根をいれ直して若者を健全に育てていく。いいところを誉めて、それを伸ばすことによって認める、認められると人は応えようとするからいい人になって、きれることもなくなる。

司馬遼太郎さんが「21世紀のきみたちへ」と言う文章を書きました。小6生の教科書に載っています。「私達は現世に友達がいるけれど、歴史をしらべたらいっぱい友達がいる、そこから学ぶことが多い。人間は随分自然を破壊してきたけれど、反省もみえている。人間は本能というもので基本的にはある。しかし、思いやりをみんなにもってほしい、思いやりは本能ではないから訓練しなければ身につかない、人が転んだら、痛かっただろうと思うところからおもいやりは始まる」と言っている。そして「鎌倉時代の人達ももっとも大切にされた言葉、たのもし、21世紀を生きるきみたちにたのもしい人になってもらいたい」と書いています。

東京五輪、よろしくお祈りします。



に、記念館を訪れてくださいました。今回は、久しぶりの訪問となり、周囲の景観の変化に驚きつつも、懐かしそうにあちこちを見学していかれました。

現在は、ニュージーランドの大学の日本語学科で教鞭をとっているレイチェルさん。「今のように通信手段が発達していない時代に、アメリカに渡って勉強をした梅吉さんは大変だったと思う。自分の生徒たちにも伝えて行きたい」と語ってくださいました。

## 米山梅吉と万代順四郎の青年時代 —三井銀行時代の二人の関係—

一橋大学大学院商学研究科

特任講師 堀 峰 生



苦勞した万代の就職活動  
米山梅吉が三井銀行大阪支店長に就任していた頃の1907年、青山学院高等科出身の一人の青年が新入行員として大阪支店に赴任して

きました。この青年ののちに三井銀行会長となり第一銀行との合併を主導して帝国銀行を成立させた万代順四郎でありました。

そもそも、当時実業界の中樞部にあった三井財閥直系の大銀行である三井銀行に、万代が易々と入行できたわけではありませんでした。万代は、青山学院時代に苦学していましたが、就職活動にも苦勞して卒業後約半年を経過した同年の9月、青山学院の推薦を得てようやく三井銀行に採用が決まったのでした。

1907年7月発行の『青山学院校友会会報』第10号には、万代が卒業した1907年3月の卒業生の消息が掲載されています。その年の高等科の卒業生は32名であり、出身地を地区別に見ると東北出身者が一番多く9名、続いて九州8名、以下中部5名、関東3名、北海道・中国・四国各2名そして東京1名となっています。東京周辺からの学生は少なく、地方特に東北・九州の出身者が多いことが分かります。そして、卒業後の行方として32名中12名の消息が記載されており、12名中9名が中学校および商業学校の教師として就職し、1名がアメリカに渡航、そして2名が実業界へ就職しています。青山学院の教育は、教師養成がメインであったことが窺えます。消息不明の卒業生の中には、未だ就職先が決まっていなかった万代も含まれていたのです。

当時の、青山学院の学生の就職事情について、青山学院で万代の二年後輩であった神子朝太郎は次のように回想しています。

「当時の青山では、神学校を出ればキリスト教界に、高等科を望むものはたいてい教育界に入りました。銀行や、外国商社や、郵船などに行った人は、卒業の時のはずみで、そちらへ進んだともいえます。学校では、実業方面の話あまり聞かないので、自らそちらに、近づけなかったのです。万代さんの就職事情は、後輩としては、噂と推測に過ぎませんが、その頃、先輩の方がたが、実業界で名声をあげるようになられたので、万代さんは、いわゆる天の時に恵まれたとも見えます。」

もともと青山学院では、銀行関係に学生を推薦する場合、学業成績が優秀であること、家柄、家庭環境が良いこと等が普通であったことから、苦学生万代が推薦されることは異例なことであったのです。推薦されたのは青山学院院長本多庸一や岡田哲藏を始め教師から信頼を得ていたからであり、また青山学院の先輩であり既に三井銀行に入行していた米山梅吉・間島弟彦と本多や岡田との特別な関係があったからでした。万代は、本多院長の推薦状を持って、まず三井銀行横浜支店に青山学院の先輩間島を訪ねています。また、米山と岡田とは、夫人同士が学校の同期生であったことから懇意で、万代が大阪支店に赴任する際には、岡田夫人から米山支店長宛の紹介状を持参しています。

万代の新入行員時代  
青山学院時代には商学関係の科目は無く、銀行業務に関わる実務を全く学んだことが無かったことから、万代は入行当初から実務の習得には苦勞しました。青山学院の教育は、実業人を養成するようなカ



新入行員時代の万代  
『種崎く万代順四郎の生涯』より

リキュラムではなかったのです。万代は青山学院の教養科目だけでは不十分と考え、就職浪人中の半年間、神田の簿記学校に通って勉強を重ねています。万代が入行した1907年より行員の教育、資質向上対策の一環として英語・筆跡・珠算・簿記・現金勘定の5科目を試験科目とする「芸術試験制度」が導入されていますが、万代の試験成績は68位でした。リーディング・バンク三井銀行に就職できたとはいえ、万代は決して入行当初から将来を約束されていたエリートというわけではなかったのです。特に珠算にはてこずり神経衰弱になって暫く銀行を休むほどであったようです。当時の様子を万代夫人のトミさんは、次のように記しています。

「当時三井銀行大阪支店長で在られました米山様には、この時の初対面からついに生涯を通し、非常なご恩顧を蒙りました次第でございます。入社早々珠算で苦勞し、神経衰弱になり、ソロバンを見るのも嫌になった時代もあって、友人のお奨めで暫く休養させていただき、また教えられて頭から水をかぶったり、冷水摩擦などの荒療治をして、すっかり治しましたようで、この冷水摩擦はその後永くつづけておりました。」

その後、万代は順調に回復し、高等商業学校や慶応義塾出身の同期に交じって、銀行実務に着実な心構えで取り組んで行きました。万代は、「小切手がどのようなものかということも知らなかった。まず銀行の実務を勉強しようと思い、相当努力した。」と述べています。

#### 米山の万代への寵愛

幸いだったのは、人間性を重んじる米山に可愛がられたことです。米山は本多の人格教育から感化を受け、仕事面だけでなく人格面を重んじて人を評価したことが万代には幸いでした。万代も本多院長から大いに感化されその影響を受けていましたから、二人の間には相通じるものがあつたのかもしれない。

入行まもなくして、米山支店長がチブスを患い転地療養中は、支店長宅の留守番役を米山から頼まれています。万代は、次第に支店長宅に頻繁に出入りするようになり、米山が本店に出張する時には必ず支店長宅に宿泊するようになっていま

た。米山の子供たちも万代が来ることを楽しみにするほどになり、米山家からは家族同然の扱いを受けるようになって行きました。万代は、米山から社会人としての教育を授かると共に、米山を実父のように慕いながら銀行員生活をスタートさせたのです。

米山は、大阪支店長時代に池田成彬と同時期に常務となり、その後池田と共に三井銀行を牽引する存在となりましたが、爾來、万代は米山に終始愛され、万代もまた米山の深い恩顧を終生忘れることはありませんでした。1908年7月発行の『青山学院校友会会報』第11号には、「校友の動静」として「万代順四郎氏、三井銀行大阪支店員となり、校友なる同支店長米山梅吉氏の篤き信任を受けつつあり」と記載されています。万代は、のちに米山を回顧して次のように述べています。

「米山さんに可愛がられた人は沢山ありましたが、その中でも私は最も可愛がられた一人でありましょう。晩年には、私の懇意な友人に私のことを『倅が倅が』とっておられたと聞いていますが、米山さんは実際私を、実子同様に見て下さったばかりでなく、色々の点について教育して下さいました。そして私も米山さんを実の父親のように敬慕しました。」

#### 万代の結婚と米山夫妻

1911年、万代は青山学院の先輩間島が支店長であった横浜支店に転勤となります。万代は、横浜支店への異動は「米山さんの配慮によるものと思う」と述べています。1913年、既に常務として本店にいた米山がアメリカに4ヶ月間出張の間、万代は米山宅から当時中学生であった米山の長男東一郎と往路同伴し、横浜支店に通勤することもありました。横浜支店在勤中の1914年1月、万代が31歳の時日本棋院名誉棋士・八段広瀬平治郎の次女トミと結婚していますが、見合いの際万代の母親代わりとなったのは米山夫人でした。結婚式は築地精養軒で行われ、銀行関係では米山梅吉・間島弟彦、学院関係では岡田哲蔵が祝辞を述べています。結婚から宴会の段取りまで、一切の手配は米山が行ったそうで、新居の家財道具は、台所道具のほかはすべて米山が大八車で届けてくれたと万代は述べています。

#### 米山の信託会社設立と万代

その後、万代は支店営業部門を中心に職歴を重ねて1923年1月、ロンドン支店開設準備を目的とするイギリス出張に出ています。当初、池田成彬からイギリス出張の打診を受けた際に、万代は辞退を申し出ていますが、三度目の勧誘でようやく承諾しています。万代の辞退の理由は定かではありませんが、万代のメモに「三井信託設立の計画（大正11年秋）を聞く、同時に帰国後信託に転出を約す」とあり、米山に三井信託設立計画があることを聞いた万代は、慕う米山と共に三井信託への転出を考えていたのではないかと推察されます。

米山の「奉仕の精神」と万代の「利他の精神」  
帰国後万代は、名古屋および大阪の両支店長を歴任し、三井財閥系企業に留まらずに業況不味先

伸べています。その後、万代は常務・会長へと昇進し、引退後、戦後まもなく井深大や盛田昭夫らによって設立されたベンチャー企業である東京通信工業（のちのソニー）の会長を引き受けて若い技術者たちの精神的支柱として活躍しました。

万代は、「自分の一生のうちで最も大きな影響を与えてくれた人は、一族では母と兄であり、社会に出てからは三井の池田（成彬）、米山（梅吉）両先輩であり、学院時代は本多院長先生であった。」と述べていますが、伝統的な三井財閥にあって万代が三井銀行のトップ・マネジメントへ昇進したことを考えるとき、特に万代が青年時代に米山から授かった特別な薫陶が大きな礎になっていたのではないかと考えられます。それは、米山が志向した「奉仕の精神」の影響であり、万代においては「利他の精神」として実を結んだものと考えられます。

## 米山梅吉と池田成彬

### 堀江朋子



私は三年ほど前に『三井財閥とその時代』という本を上梓した。

大学時代の同期生を通じて三井十一家の一家松坂三井家の第十一代当主故三井高周氏とお会いし、三井の歴史を書いてもらえないかという申し出を受けた。無名の書き手を信用して下さいのことである。

江戸時代は豪商として活躍し、明治維新以降は、明治政府と共に日本の近代化を成し遂げ、最大の財閥となった三井も、終戦後、GHQの財閥解体で財閥としての歴史は終焉を迎えた。則ち、終戦とともに、三井家同族が経営陣に君臨する時代は終わったのである。

当時、高周氏は十六才で、成蹊中学（現成蹊高校）の学生。父親が早くに亡くなり、長兄も早逝していた。跡を継いだ次兄高素も昭和十九年に歿したため、三男高周氏が松坂三井家の当主となり、家督を相続した。

そして、経済人の公職追放で、財閥の当主の一

人として、学生の身分で追放を受けた。「日常の生活は何の拘束も受けなかったし、支障はなかったが、その時の重苦しい気持ちは忘れることができない」という高周氏の言葉は、今も私の胸の裡にある。

高周氏の思いに応えるべく、手探りで書きはじめたのだが、その遙かな歴史に加え、日本最大のコンソェルンとして、多くの企業をその傘下に収めた三井が持つ膨大な資料を渉猟して行くことは容易ではなかった。深い森の中に分け入って道を失い、どうやって光明をみつけようかと、途方に暮れたことが何度かあった。

「時間はかかってもいいですよ。研究者や従来作家が書いたものにはない、貴方の視点で書いてください」という高周氏の言葉に励まされてなんとか書き終えたというのが、今もっての実感である。



江戸、明治、大正、昭和と続く三井の歴史の中で、私は実に多くの人物と出会った。その人物に寄り添い、その生き方・行動や考え方を検証して行くうちに、深く感情移入してしまう人物が現れる。三井財閥の歴史に登場する男性の中で、私が恋した人物は、米山梅吉と池田成彬。



丹 幸馬 米山梅吉  
岩原謙三 渡辺専次郎 池田成彬

米山梅吉は一八六八（慶応四）年二月生まれ、一九四六（昭和二一）年に歿している。一方、池田成彬は一八六七（慶応三）年七月に生まれ、一九五〇（昭和二十五）年没。同時代を生きた二人である。三井銀行に入社は、米山が一八九七（明治三〇）年、池田が一八八八（明治二十一）年と、池田の方が九年先輩である。

一九〇九（明治四十二）年、米山は三井銀行取締役となり、この時常務取締役だった池田成彬とともに、「三井銀行は池田と米山の二頭立ての馬車」といわれる一時代を築いていく。しかし、二人が活躍した明治の終わりから昭和十年代は、金融恐慌、右翼テロ、労働運動、そして戦争への突入と世情騒然とした時代であった。

一九一九（大正八）年、池田と米山は協力し、持ち株会社三井合名の理事長団琢磨を説得して、株式の一部公開をした。外部からの資本参加を認めなかった当時としては画期的なことだった。銀行は、一企業や財閥の恣意に動かされることなく、社会経済に貢献すべきだというのが、池田や米山の考えだった。二人の理念である銀行の社会化を断行したのである。そして、一九三三（昭和八）年、三井合名会社筆頭常務理事となった池田は、北三井家十代高公とともに翌一九三四年四月に三井報恩会を設立した。三井報恩会理事長には

米山梅吉が就任した。

三井報恩会は「我が国社会の福祉増進並びに文化の向上発展に貢献する事業を経営助成する」ことを目的とした法人だった。報恩会へ、三井合名会社は三千万円の寄付をおこなった。三千万円といえば、三井合名の二年間分の所得である。巨額の寄付に反対の声も挙がったが、池田は押し切った。池田は書いている。「財閥が自己の財的人的の力に依り事業を経営して今日の大をなしたるものとは申すものの国家の保護を受け国家興隆の潮流に乗り社会民衆と共栄共存の大義に順従した結果になることを忘れてはならぬ」（昭和七年頃の執筆）。

池田の理念を行動で具現化したのは、米山梅吉である。米山は、自らの足で、病院や施設を周り、農村を視察して、綿密な援助の手を差し伸べていった。米山の三井報恩会在任は、一九三四（昭和九）年から一九四四年までの長きに亘った。池田と米山、二人の倫理的実業家によって三井の社会貢献は実現したのである。ただ、当時、三井は、国民の経済的利益を犠牲にして得た巨大な利益のほんのわずかを還元したに過ぎないという見方もあった。今では考えられないほどの資本集中、階級格差があった時代である。

剛直清廉の人といわれた池田は遠くを見通す目を持つ、伶俐な合理主義者だった。それが、時には冷徹な決断ともなった。だが目の前の利害や人間関係、それに感情に捉われずに国家百年の計を考える池田のような人物が、今、何処にもいないという気がしてならない。そういう意味でも池田は私の憧れの男性である。

米山梅吉は、企業の社会奉仕を考えた人物である。日本初のロータリークラブを公共社会奉仕の理念で創立したのは、ここに書くまでもないが、三井信託銀行の創立も彼の信念「開拓と奉仕」の則ったものだった。例えば、経営基盤が脆弱な企業にも融資を行った。三井所有の不動産の分譲地についても、丁寧に良質な工事を行った。三井報恩会の理事長になってからは、彼の篤実な人柄を示すように、自らの足と目を充分に生かして多くの実績を残した。報恩会では、医療、学術研究、農村振興、社会福祉などへの援助を行ったが、米山は、全国のハンセン氏病私設を周り、助成先の

農村や漁村を訪れた。また、事業の進み具合を自ら確認するという徹底ぶりだった。

当時、貧しい家では、子供に弁当を持たせてやれなかった。欠食児童と呼ばれる子供たちが少なからずいたのである。米山は、ビスケットを携えて、彦部村の視察に訪れた。ビスケットなど、普段口にすることがない子供たちは、学校で配られたビスケットを大切に家に持ち帰り、家族全員で食べたという。このような土産は、米山のポケットマネーで賄われた。

彼が成した社会貢献は、三井報恩会理事長としてというよりは、彼の人間としての資質そのものが成したものであったろう。

写真で見るとなかなかの男前である。その人間性と合わせて、米山梅吉も私の憧れの男性である。

米山梅吉と池田成彬。車の両輪のように三井の社会貢献を引っ張っていった二人だが、人間としての資質は少し異なるように思う。池田が「知の人」ならば、米山は「情の人」。いや、二人とも情理兼ね備えた素晴らしい男性だったことを改めて認識したのが平成二十六年六月十一日に、岩手県紫波郡紫波町彦部で挙行された「三井報恩会事業記念碑除幕式並びに祝賀会」に出席した時であった。

私は、一年前の八月にここを訪れた。『三井報恩会と岩手県彦部村 農村更正への挑戦(昭和十年～昭和十五年)』の著者で、紫波町文化財調査委員の任にある長澤聖浩氏から頂いた手紙がきっかけだった。私は岩手県のある地方のふるさと大使を仰せつかっているが、そこの夏祭りに参加した帰りだった。東北本線日詰駅に長澤氏が出迎えて下さり、三井の援助で造られた施設跡などを見学した。その殆どが今はないが、「三井報恩会特定振興村、岩手県指定経済更生村、中央教化団体指定村」と書かれた丈の高い木製の標柱は、当時の彦部村の人々の誇りだったという。その近くに大巻行動作業場が三井報恩会の援助で創設され、薬工品を生産する場所となって、多くの女性が働いていた。これも今はなく、跡地には倉庫が建っていた。また、当時大巻共同作業所で使用された薬打ち機械、製縄機、製産機などを見せて頂いた。いずれも長澤氏が所有するものである。他、三井関連のいろいろ



平成26年6月11日 旧彦部村 三井報恩会事業記念碑落成記念

ろな場所に案内して頂き、その日の夕方、東京へ帰った。

日詰駅には、以前も降りたことがあった。紫波町彦部にある野村胡堂記念館に佐藤昭八氏の講演を聞きに訪れた時である。一時職場を同じくした佐藤昭八氏は、野村胡堂の書誌を作成・研究している。その時、高台にある記念館から眺めた北上大地の美しさを忘れることはない。四方に広がる緑の大地は陽光に光り輝いていた。北西に岩手山。東に早池峰山を主峰とする北上高地。西南に奥羽山脈。傍らには北上川の清流。その時、懐深い自然に抱かれた東北の人々を羨んだ。しかし、この地方は東北でも有数の窮乏のひどい地域だったことも、長澤氏の説明で知った。飢餓・飢饉との戦いの歴史を刻んでいたのである。豊かな自然を抱く大地は、荒ぶる大地であった。一九三三（昭和八）年、三陸大津波、一九三四（昭和九）年、大冷害。政府主導の「経済更生運動」は、遅々として進まなかった。この時、三井報恩会は、綿密な調査を行い、青森県から西平内村（現平内町）、岩手県からは彦部村（現紫波町彦部）を抽出して援助の手を差し伸べた。その実働部隊の長が米山梅吉で、資金を捻出したのが池田成彬。この二人は、前述したように、企業の経済活動は、己の利益ばかりに捉われず、その利潤を社会の経済活動に還元すべきだという理念を持っていた。

三井報恩会が創立されてから八十年後の二〇一四（平成二六）年六月十一日、三井報恩会事業記念碑の除幕式に参列しながら、私は自分の思いに沈んでいた。人々の心に残り、後世に語り継がれる二人の男の事を思っていたのである。米山梅吉と池田成彬。やはり、私の男性を観る目は間違っていなかったと。

## 米山さんの肖像画（原画）

元三井信託銀行副社長 谷内宏文



はじめに

この館報を読まれる方なら写真を通して先刻おなじみの、米山さんの肖像画は、米山さんが創業した三井信託株式会社から三井信託銀行へ、さらには三井住友信託銀行へと引き継がれて、一般の方にはなかなか見る機会がありませんでした。それが、このたび当記念館に寄贈されることとなり、ご来館の皆さんが身近に見ることが出来るようになります。

ここに至る経緯とこの肖像画について、4月26日の当館春季例祭の日に催された理事会で筆者から説明する機会をいただきました。以下に若干の補足を加えて当日お話ししたことを記録いたします。

### 理事会での説明記録

このたび米山さんの肖像画を三井信託から記念館に寄贈するに至ったことについてお話いたしました。貴重な時間を割いていただきありがとうございます。

まず、この肖像画について、話をさせていただきます。

この肖像画は、三井信託では長い間「社室」、つまり会社のお宝の様に取り扱われてきたと私は感じています。

具体的に言いますと、普段は、毎月一回催される取締役会の場所、「役員大会議室」と呼んでいましたが、そこでは35名ほどの取締役と監査役が円卓型に着席します。その際の会長・社長が着席する背後の中央の壁にこれが掛けられて、あたかも米山さんが役員全員を見守っている様なかたちで飾られていました。

また、お正月や、株主総会が終わった様な時期には、大勢のお取引先のお客様がご挨拶に来られますが、その時には「役員大応接室」の壁に掛けられて、米山さんも一緒にお客様をお迎えする様なかたちで飾られていました。

この肖像画は白滝幾之助という画家によって描かれたものです。白滝画伯は、昭和35年に87歳で

没した、米山さんより5歳ほど若かったほぼ同時代の人です。若い時に東京美術学校で黒田清輝に学び、明治の後半から大正・昭和初期にかけて、肖像画の第一人者とされて活躍された著名な画家でした。

肖像画は一般の風景画などと違って、作者の作品が一堂に集められて展示される展示会の様な機会がほとんどありません。それぞれの所有者が大切に所持して「門外不出」の様な扱われ方をしますから、関係者だけが見る機会があるのが一般的です。

白滝画伯についても例外ではないのですが、私の知っているのは、歴代の日本銀行総裁を描いたもののいくつかです。あの復元された「東京駅舎」と並ぶ辰野金吾の傑作「旧日本銀行本館」は、新館が出来てからは、日銀の資料展示館の様になっていて、今でも予約すると見学出来るはずですが、あの中に歴代総裁の肖像画を陳列した部屋があります。あの中に白滝画伯の描いたものが何点かあったと記憶しています。例えば、五一五事件の年に暗殺された井上準之助。米山さんと共に長く三井銀行の経営に当たり、後に日銀総裁となり、近衛内閣の大蔵大臣になった池田成彬。さらには、東京ロータリークラブの発足時の会員で米山さんの友人だった深井英五といった総裁も白滝によるものだったと思います。

この他に、私は直接見ていませんが、国会議事堂内にある衆参両院の歴代の議長や総理大臣の肖像画や、東大・慶応・早稲田等の各大学の資料館などにある歴代の総長や学長の肖像画も白滝画伯によるものが多いと聞いています。

この米山像が描かれたのは、おそらく昭和5年頃と思われると思いますが、白滝にとっ



白滝画伯による米山の肖像画

ても米山さんにとっても絶頂期・円熟期のもので、絵画芸術品としても大変価値の高いものと言えます。当時白滝画伯にこの程度のもを描いてもらうには、おそらく、当時のお金で千円ほどの画工料、今のお金にして、三百万から四百万円は要したのではないのでしょうか。当時の千円は中堅サラリーマンの年俸に相当します。

この肖像画自体について私がお話出来るのは以上の様なことですが、実は私個人にはこの肖像画に特別な思い出があります。あれは平成3年の夏ごろでしたが、当時の三井信託の静岡支店長からこんな話が聞こえて来ました。「米山記念館へ行って見たら、米山さんの肖像画の写真が色あせて古くなっているの、新しいものに変えてはと思うが、どうでしょう。」と言うのです。それまで、記念館にあったものはカラー写真を拡大したものだったのです。

そこで私は、当時大日本印刷でしたか凸版印刷でしたかが、精巧な油絵の複製技術を開発したと言う美術雑誌の記事を思い出しました。それは、原画と同じ様なキャンバスに、カラー写真印刷をして、その上に専門技術者が原画を見ながら油絵具を重ねて行くというものでした。それによって油絵独特のタッチも似せることが出来ると言うのです。そこで早速、総務部に命じて3点を作らせ、当記念館と青山学院にそれぞれ1点ずつ寄贈しました。それが今隣のホールに掛けられているものです。

その様なことで、私にはこの肖像画への強い思い入れがあり、そのため三井信託が住友信託と合併後どんな扱われ方をしているのかと、ずっと心配していました。その心配が高じた結果、私は、この3月の初旬に三井信託時代の同僚だった3人の友人に手紙を出しました。一人は私が副社長だった時の藤井元社長で、あとの二人は、その藤井の後の二代の社長経験者です。元社長は退任後も「顧問」として会社に籍がありますから、彼等に言えば何とかしてくれると考えたからです。手紙では「あの米山像が今どう扱われているのか調べてほしい。この際、出来れば米山記念館に寄贈する様に尽力してほしい。」と伝えました。そうしましたら、二人目の西田顧問が早速動いてくれて、めでたく記念館へ居を移すことが実現したと言う次第

です。

以上が理事会でお話した記録です。

あとがき

正式の寄贈は、9月13日に予定されている記念館の秋の例祭で行われ、皆さんに披露されるはずですが、その後、今まで1階ロビーで展示されていた米山さんの三井信託社長時代の机と椅子、それと「インチボルト」と呼ばれていた「UY」の米山さんのイニシャル入りの専用金庫と共に、展示される予定です。あの机と椅子は10年間の社長の間、日曜日を除き毎日米山さんが使用したものですから、記念館にある物品の中でも最も米山さんの身近で長く接していた、大変貴重な品なのです。



米山が使っていた机と金庫

筆者は、一昨年傘寿を迎えました。気が付けば、すでに身の回りの整理をしなければならぬ歳になりました。旧三井信託と自分自身の所持する米山さんにゆかりの品々や資料を、それぞれ落ち着くべき所に移譲することも、この「身の回り整理」の大事な一つと考えて来ました。今年は米山さんの69回忌に当たるはずですが、このたび、最も大切にしてくれる当記念館に、この肖像画を納めることが出来て、これが三井信託から移譲する品の最後の物となるでしょう。

この機会に立ち会えたことを心から嬉しく思っています。

私自身のことについては、昨年末に、若い時から集めてきた、米山さんに関する図書40冊ほどを記念館に受け入れてもらいました。これ等の中には、三井信託の先輩やそのご遺族から譲り受けたものも多く、それ等は古書店ではもう手に入らないものばかりです。そうして、今残されている整理の最後のことは、拙著「点描 米山梅吉」の著作権を記念館に寄付して、第二版を出したいということです。

白滝幾之助は、明治6（1873）年兵庫県朝来市に生まれた。17歳の頃、鉾山技師を目指して上京する。明治23年、下宿先で同宿していた同郷の和田正造（和田三造・洋画家）に誘われて洋画家山本芳翠の画塾を訪ねたことがきっかけになり、画家になることを決意する。山本の画塾が黒田清輝に譲られてからは、黒田一門に入る。そして東京美術学校に入学し、本格的に学ぶ。黒田清輝は、法律を学ぶ目的で行ったフランスでの留学で、山本芳翠や美術商林忠正に出会い、画家に転向する。東京美術学校の西洋画科発足から関与し、日本洋画の方向性を決定付けた。黒田は印象派の影響を受け、光の表現を重視し「外光派」と呼ばれる作風を確立した。白滝もこの「外光派」に属するが、中でも抑えた色調による穏健な写実的画風を追求したといわれる。



白滝幾之助（1898）  
『自画像の証言』より

白滝画伯と三井との繋がりは、彼が明治40（1907）年にロンドンへ留学したことに始まる。明治41年1月、室町三井家第十一代高精は、三井物産ロンドン支店へ赴任する。ここで二人は知り合う。これをきっかけに二人の交流が始まり、高精が大正末頃から蒐集した西洋画コレクション「三井コレクション」を作成するにあたり、白滝が協力している。白滝の穏健な画風と、高精の保守的な性格で馬があったのではないかとわれている。昭和15（1940）年11月21日、隠居した高精は、麹町平河町自宅の敷地に公開ギャラリーを開館。作品を展示し、毎週土曜日には一般にも公開された。コレクションの内容は、コロ、マネ、モネ、ピサロ、ミレー、ルオー、マティス、ドガ、ラファエリといった外国人画家達の作品や黒田清輝、岡田三郎助、和田英作ら日本の帝展系列の画家など日本人画家も含め約200点にのぼった。一度に約25～30点あまりの作品が公開され、目録や絵葉書も作成されたという。また、多くの新進画家の作品も加え、このコレクションは後進の育成にも力を入れていた。

『今日ペンさんが、三井洋画コレクションにある

ラファエリー作の「大通り」というクレパスのようなこの人の発明したもので描いた絵の写真をくれました」（宮本百合子著『獄中への手紙 1942年10月31日』より）

「ああ三井コレクション/ピサロ、モネ、ボナール/ルオーのかなしい女達が/せつなく赤いライトにおどる/焼けてしまったあのローランサンの赤い額と/ゴッホの燃えている木と草/私の夢は夢く駆ける」



（いわさきちひろ著「草穂」より）

刺激をあたえたことであろう。

残念ながら、戦火によりギャラリーは焼失してしまう。幸い、収蔵庫は焼けずに残ったが、戦後、ギャラリーが再開されることはなく、高精によって三井コレクションは売り出され、現在はまとまってその作品を見ることは叶わない。

米山さんは、実業家として自分の跡をついでほしいと思っていたであろう長男を失い、次男は芸術への道を進むことを希望した。息子の選択に戸惑いながらも、どうせ学ぶのであれば、と三井と懇意になった白滝に、米山は自分の息子を託した。

「父のこの芸術性こそは、兄駿二の絵画芸術として実ったのである。兄駿二は元来器用な少年であって、高等師範附属中学入学当初はスポーツの方面でその器用さを発揮していたが、いつ頃からか絵画に興味を持ち始めた。兄駿二が毎日のように、ゴッホの「自画像」の色刷りを手本にして鏡に向かってせつせと絵筆を動かしている姿は、やがて

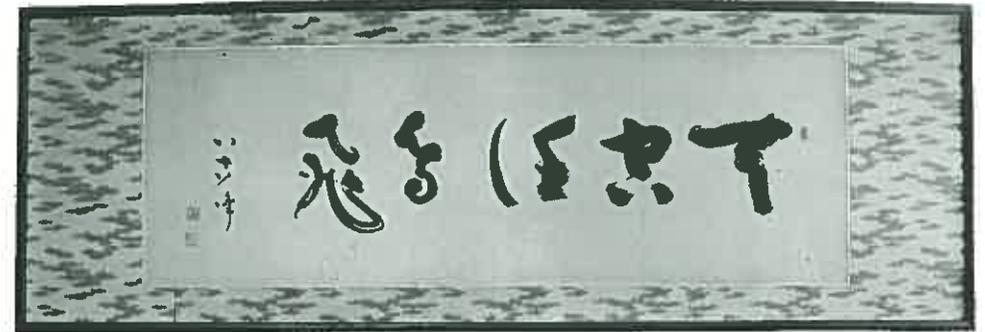


三井 高精  
『三井家文化人名録』より

父の眼にもとまったようであった。恐らく父は、芸術に精進しようとしている兄を見て、半ば喜びを感じながら半ば不安を感じたらしい。大正十三年か十四年の秋、兄が全く自己流で仕上げた「自画像」をかつて帝展に出品したことが「財界名士の息 帝展へ搬入」といった見出しで新聞に報せられるや、父の驚きもひとしおであった。もちろんそれは落選のうきめを見たが、この時父は兄

に自己流をやめて先生につくことをすすめ、父の知人であった白滝幾之助画伯の門をたたかしたのである。（兄の死後、父が二科展に匿名のY氏賞を寄附したのも、兄の芸術を永く記念したかったからであろう。）（米山桂三著「父とその子達」より）Y氏賞は後に昭和洋画奨励賞と名を変える。昭和3年第一回の受賞者は東郷青児であった。

## 米山揮毫の扁額寄贈される



この度、東京都世田谷区在住の木内康英氏より、米山梅吉の書いた扁額が寄贈されました。康英氏の祖父七之助氏は明治9年生まれ。静岡県田方郡韭山町（現伊豆の国市）出身で、後に東京へと移住します。この七之助氏が同郷というよしみで米山の知己を得、直接この額をいただいたのではないかと思います。七之助氏のご子息重彌氏が東神倉庫（現三井倉庫）へ就職するときにも、米山に相談しているようです。木内家には七之助氏、重彌氏への米山からの手紙も保存されているそうです。残された手紙の日付から、木内家と米山とは昭和20年頃までやりとりがあったようです。昭和20年といえば、米山の晩年にあたりますが、親しい交流が晩年まであったことが伺えます。康英氏は、ご尊父から「米山さんには世話になった」とよく聞かされていたということですが、詳しい内容については尋ねないまま重彌氏も鬼籍に入ってしまう、実際の付き合いの内容やこの額の由来も、詳しいことは何一つはっきりしないまま月日

が過ぎてしまったそうです。

今回、物置の中から、偶然この額が見つかり、「八十八峰」という雅号から米山とご祖父との繋がりが浮かび、たまたま乗った御殿場線納米里駅で目にした米山梅吉記念館の看板と相まって、もしかして、と気がつかれたそうです。

文字は「天空任鳥飛」と書かれています。これは清の文学者趙翼（ちょうよく）の随筆で、この前に「海闊従魚躍 天空任飛鳥」があり、「海闊くして魚の躍るに従い、天空にして鳥飛ぶに任す」と読めます。藍壺の落款も押されています。

米山が乞われて書いたものか、何かの記念に送ったものか、どのような状況でこの額がやりとりされたか、今となっては知るよしもありませんが、大きな海原に自由に泳ぎ回る魚たちや、果てしなく広がる空高く飛ぶ鳥たちの自由な姿は、私達の心を清々しくするものです。木内家と米山との気取りのない交流の様子が偲ばれます。

# 米山梅吉記念館秋季例祭

## お知らせ

- 日時** 平成26年9月13日(土) 午後2時～
- 場所** (公財)米山梅吉記念館ホール  
新幹線三島駅よりタクシー5分 東名沼津ICより15分
- 内容** 例祭 創立45周年記念式典  
・功労者感謝状贈呈  
・米山梅吉肖像画贈呈式
- 講演** 【講師】長澤聖浩氏  
三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会会長  
〔演題〕「三井報恩会と彦部村」(仮)
- 懇親会** 講演者、参加者と一緒に懇親 登録料無料  
多くの皆様のご来館をお待ち申し上げます。

## 米山梅吉記念館のご案内

### ● 開館時間 ●

午前10時～午後4時

### ● 休館日 ●

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日  
(5月・8月の特定日)



米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 24

発行日 平成26年8月10日  
 発行者 公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助  
 〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1  
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101  
 URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>  
 e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp  
 印刷 フタバ印刷株式会社